

日蓮大聖人御書全集

みょうしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

びょうしろうやく こと

（病之良薬の事）

新版
1962
〜
1964

みようしんあまごぜんごへんじ
びようしろうやく こと
妙心尼御前御返事（病之良薬の事）

けんじがんねん
建治元年（'75） 8月16日 54歳 窪尼

淡 柿 ふたこ 茄 子 ひと籠 た そうら お
あわしがき二籠・なすび一こ、給び候い了わんぬ。

にゆうどうどの ごしよろう とうど こうてい へんじやく もう
入道殿の御所労のこと。唐土に黄帝・扁鵲と申せし

医 てんじく じすい きば もう 医
くすしあり。天竺に持水・耆婆と申せしくすしあり。これ

よ 宝 まつだい 医 し ほとけ もう
らは、その世のたから、末代のくすしの師なり。仏と申せ

ひと 似
し人は、これにはにるべくもなきいみじきくすしなり。この

ほとけ ふし くすり 説 たま いま みようほうれんげきよう ごじ
仏、不死の薬をとかせ給えり。今の妙法蓮華經の五字こ

ごじ えんぶだい ひと やまい ろうやく
れなり。しかも、この五字をば「閻浮提の人の病の良薬な

説

そうら

にゆうどうどの

えんぶだい

うち

にほんこく

り」ところとかれて候え。入道殿は、閻浮提の内、日本国

ひと

み

やまい

受

そうろう

やまい

ろうやく

の人なり。しかも身に病をうけられて候。「病の良薬な

きようもんけんねん

り」の経文顕然なり。

うえ

れんげきよう

だいいち

くすり

波

琉璃

おう

もう

その上、蓮華経は第一の薬なり。はるり王と申せし悪王、

ほとけ

親

によにんごひやくよにん

ころ

そうら

ほとけ

あなん

仏のしたしき女人五百余人を殺して候いしに、仏、阿難

せつせん

遣

しょうれんげ

取

寄

み

触

たま

を雪山につかわして、青蓮華をとりよせて身にふれさせ給

蘇

しちにち

とうれてん

う

いしかばよみがえりて、七日ありて忉利天に生まれにき。

れんげ

もう

はな

とく

はな

そうら

ほとけ

蓮華と申す華は、かかるいみじき徳ある華にて候えば、仏、

みようほう

譬

たま

妙法にたとえ給えり。

ひと し

病

とうじ

壱岐

また、人の死ぬることはやまいにはよらず。当時のゆき・

対馬者

やまい

皆

蒙古びと

いちじ

つしまのものども、病なけれども、みなながらむこ人に一時

打殺

やまい

し

ふじよう

にうちころされぬ。病あれば死ぬべしということ不定なり。

病

ほとけ

おん

計

また、このやまいは仏の御はからいか。そのゆえは、

じようみようきよう

ねはんぎよう

やまい

ひとほとけ

成

由

説

浄名経・涅槃経には、病ある人仏になるべきよしとか

そうろう

やまい

どうしん

発

そうろう

れて候。病によりて道心はおこり候なり。

いつさい

やまい

なか

ごぎやくざい

いっせんだい

ほうぼう

また一切の病の中には、五逆罪と一闡提と謗法をこそ、

重

やまい

ほとけ

到

たま

いま

にほんこく

ひと

ひとり

おもき病とは仏はいたさせ給え。今の日本国の人、一人

ごくだいじゆうびよう

だいほうぼう

じゆうびよう

いま

もなく極大重病あり。いわゆる大謗法の重病なり。今の

ぜんしゆう ねんぶつしゆう りつしゆう しんごんし

禅宗・念仏宗・律宗・真言師なり。これらはあまりに病

重 わ み 覚 ひと 知 やまい

おもきゆえに、我が身にもおぼえず、人もしらぬ病なり。

やまい 告 しかい 兵 きた

この病のこくするゆえに四海のつわものただいま来りな

おうしん ばんみん 沈 生 見そうら

ば、王臣・万民みなしずみなん。これをいきてみ候わん

眼 徒 々 そうら

まなここそあだあだしく候え。

にゆうどうどの こんじよう 甚 ほけきよう ごしんよう

入道殿は、今生にはいたく法華経を御信用ありとは見

そうら か こ しゆくじゆう 故 催

候わねども、過去の宿習のゆえかのもよおしによりて、

長 やまい 沈 ひびよよ どうしん 隙 無 こんじよう

このなが病にしずみ、日々夜々に道心ひまなし。今生に

造 たま しょうざい 消 そうら

つくりおかせ給いし小罪は、すでにきえ候いぬらん。謗法

ほうぼう

やまい

だいあく

ほけきよう

き

たも

の大悪はまた、法華經に歸しぬるゆえに、きえさせ給うべ

りようぜん

詣

たま

ひ出

じつぼう

見

し。ただいまに靈山にまいらせ給いなば、日いでて十方をみ

嬉

疾

死

打

るがごとくうれしく、「とくしにぬるものかな」と、うち

喜

たま

そうら

よろこび給い候わんずらん。

ちゆうう

みち

出

来

そうら

にちれん

弟子

中有の道にいかなることもしできたり候わば、「日蓮がで

名乗

たま

にほんこく

相模

しなり」となのらせ給え。わずかの日本国なれども、さがみ

どの

内

者

もう

左右

畏

そうろう

殿のうちのものと申すをば、そうなくおそるること候。

にちれん

にほんだいいち

不

当

ほっし

ほけきよう

しん

そうろう

日蓮は日本第一のふとうの法師。ただし、法華經を信じ候

いちえんぶだいだいいち

しようにん

な

じつぼう

じようど

聞

ことは、一閻浮提第一の聖人なり。その名は十方の浄土にき

こえぬ。定めて天地もしりぬらん。日蓮が弟子となのらせ給

さだ

てんち

知

にちれん

でし

名乗

たま

あつきとう

知

由

もう

わば、いかなる悪鬼等なりとも、よもしらぬよしは申さじと

思

たびたび

おんこころ

もう

おぼすべし。さては度々の御心ざし、申すばかりなし。

きようきようきんげん

恐々謹言。

はちがつじゅうろくにち

八月十六日

にちれん

かおう

日蓮 花押

みようしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

猿

き

頼

うお

みず

によにん

夫

さるは木をたのむ。魚は水をたのむ。女人はおとこを

別

惜

故

髪

剃

袖

墨

染

たのむ。わかれのおしきゆえにかみをそり、そでをすみにそ

じつぼう

ほとけ

哀

たま

めぬ。いかでか十方の仏もあわれませ給わざるべき、

ほけきよう

捨

法華經もすてさせ給うべきと、たのませ給え、たのませ給え、たのませ給え。

たも

たま

たま